授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2152 号

Association between unemployment and insomnia-related symptoms based on the Comprehensive Survey of Living Conditions: A large cross-sectional Japanese population survey

日本の大規模横断調査を用いた失業と不眠との関連 －2010 年国民生活基礎調査から－

前田　光哉（まえだ　みつや）

博士（医学）

論文内容の要旨

不眠は、うつ病、メタボリック症候群等の健康問題や、労働災害による事故の発生等の社会経済問題と密接に関連している。日本においては、不眠の有病率は 20%を超えるとされており、不眠により大きな経済損失をきたしている。

今回、我々はわが国の大規模かつ代表的な調査の匿名データを用い、就業状況と不眠との関連を分析した。具体的には、厚生労働省より、2010 年の国民生活基礎調査の 20-59 歳の 43,865 人の匿名データを入手し、6 つの就業状況（正社員、非正社員、自営業者、その他の労働者、失業者、非求職者）に分類し、男女別に 6 つの就業状況ごとの不眠の者の割合を算定した。多変量ロジスティック回帰分析を用いて、不眠に関する性別特異的オッズ比と 95%信頼区間を計算した。対照群は正社員とし、交絡因子として年齢、婚姻状況、最終学歴、精神疾患の罹患の有無、喫煙状況、介護・見守りの状況、家計支出、不眠に関連する慢性疾患の罹患の有無を調整した。さらに、精神疾患の罹患の有無、喫煙の有無および年齢（20－39 歳/40-59 歳）で層別化して解析した。

男性では、失業者と非求職者の多変量調整オッズ比（95%信頼区間）は、それぞれ 2.5 (1.8-3.4)、2.1 (1.2- 3.7)と有意に高かった。女性では、失業者の多変量調整オッズ比（95%信頼区間）は、1.9 (1.5-2.5)と有意に高かった。精神疾患の罹患の有無で層別化した結果、精神疾患に罹患している者は、これらの関連は有意ではなかった。一方、精神疾患に罹患していない者は、これらの関連はより顕著に表れた。

結論として、失業者と男性の非求職者は、正社員に比べて不眠症状をきたしやすいことが強く示唆され、精神疾患に罹患していない者では、その関連はより顕著だった。